第 2 章

【 歴史 】
遠賀川と私たちの暮らし

2−1　遠賀川と昔の人々の暮らし（遺跡など）　20ページ
2−2　遠賀川と石炭　45ページ

大昔の遠賀川ってどんな川だったのでしょう？
川のそばにはどんなものがあったかな？昔は遠賀川の近くで石炭が採れていたの？どうやって運んだのかな？
一昔の遠賀川と人々の暮らしについて学びましょう。

2 遠賀川と私たちの暮らし

-1 遠賀川と昔の人々の暮らし（遺跡など）

（1）旧石器時代の遠賀川下流

1万年前は氷河期の終わりで、現在よりも気温が低かったと考えられています。

さて、旧石器時代の遠賀川下流の様子はどうだったのでしょうか?

遠賀平野は、まだほとんどが大きな谷で、あとは海岸部や周辺部に砂丘や砂岩や洪積世の丘がある地形だったと想像されます。

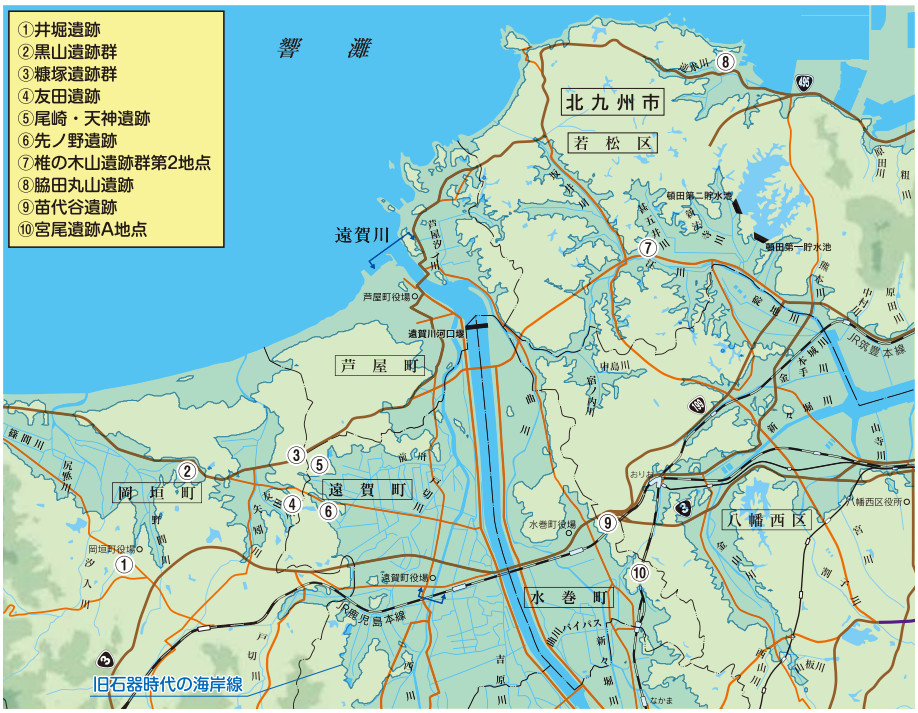
遠賀平野では1万年以上前の旧石器時代の人々はきびしい自然と戦いながら火を使い、シカやイノシシなどの中型動物の狩猟や採集を中心とした生活を始めていました。

最近の発掘調査で、遠賀郡内の遺跡から旧石器時代のナイフ型石器が多数出土しています。特に遠賀町の尾崎・天神遺跡では、旧石器や石器を作る時に発生する石クズなどが集中して発見されています。

尾崎・天神遺跡旧石器出土状況

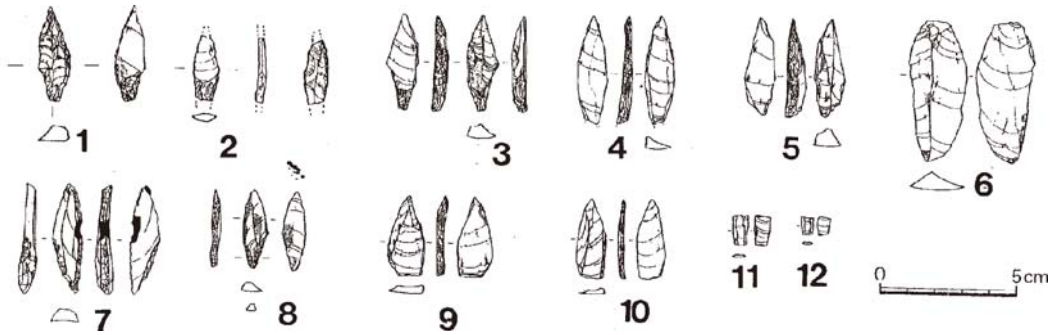
出土旧石器（ナイフ型）

●遠賀地域の旧石器時代の遺跡



海岸線ライン標高５ｍで国土交通省作成

●遺跡から発掘された石器



1友田
2黒山
3～6尾崎・天神
7宮尾A
8～12尾崎・天神

各発掘調査報告書より

遠賀平野の旧石器時代に使われていた道具などを調べてみよう

（2）「広大な干潟」だった遠賀川下流と縄文遺跡群

約1万年前に氷河期が終わった日本列島では、気候の変化が起こりました。気候が暖かくなると、列島の各地に照葉樹林帯が広がっていきました。

また、縄文時代の前期になると、遠賀川下流の地方でも海水が入り「古遠賀湾（潟）」と呼ばれる入江となりました。

それは、洪積世末～沖積世の初頭（1万年前～8000年前）のことだと考えられ、現在の直方市（河口から20キロメートルほどの地点）辺りまで海水が入ってきたと推定されています。

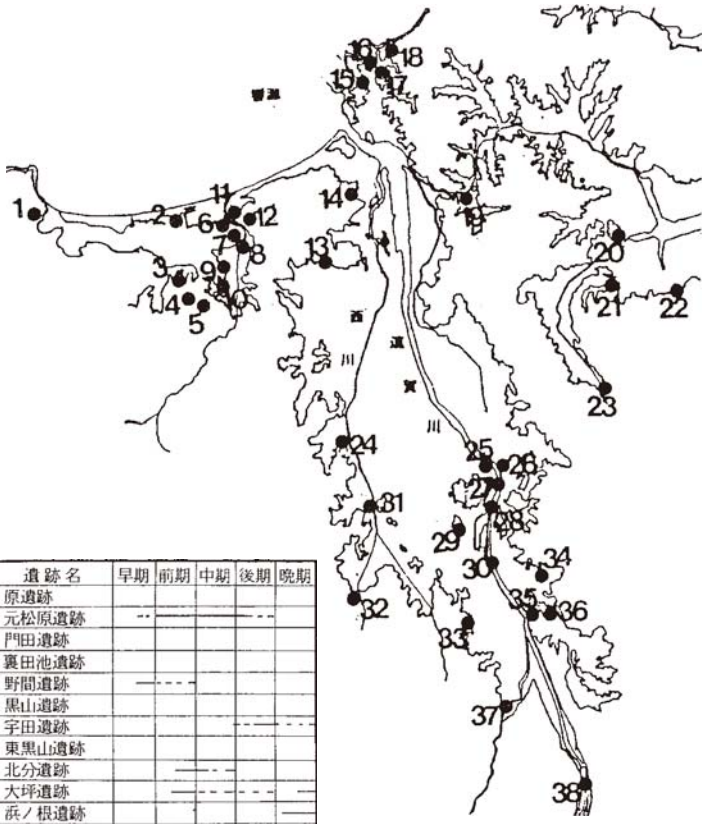
その後、上流からの土の堆積、海水面の低下による河口部の閉鎖が進み干潟となりました。この「古遠賀潟」は浅く、干潮の時には広大な干潟となり、ハマグリ、カキ、シジミなどの貝類の宝庫でした。

縄文時代の人々は、まだ、本格的な農耕を知らず、草木の実、貝、魚、イノシシ、シカなどを獲って食べていたと考えられています。

その生活の跡のひとつが貝塚です。下流一帯は、北部九州でも有数の縄文時代の貝塚群が形成され、広大な干潟周辺には、30ヶ所をこえる縄文期貝塚や遺跡が確認されています。

貝塚を線で結んでいくと縄文時代の海岸線が復元できます。

また、貝塚を丁寧に調べると縄文時代の人々が何を食べてどこに住みどんな生活をしていたのかを知ることが出来ます。



	遺跡名	早期	前期	中期	後期	晩期
1	原遺跡					
2	元松原遺跡					
3	門田遺跡					
4	裏田池遺跡					
5	野間遺跡					
6	黒山遺跡					
7	宇田遺跡					
8	東黒山遺跡					
9	北分遺跡					
10	大坪遺跡					
11	浜ノ根遺跡					
12	榎坂貝塚					
13	鬼津貝塚					
14	大城遺跡					
15	山鹿貝塚					
16	夏井ケ浜遺跡					
17	夏井ケ浜貝塚					
18	狩尾池遺跡					
19	三頭貝塚					
20	柳原貝塚					
21	陣の原貝塚					
22	黒崎貝塚					
23	永犬丸遺跡					
24	虫生津貝塚					
25	砂山遺跡					
26	中間小前遺跡					
27	垣生遺跡					
28	下大隈遺跡					
29	宮田遺跡					
30	中の江遺跡					
31	古月貝塚					
32	新延貝塚					
33	光田貝塚					
34	白岩遺跡					
35	寿命貝塚					
36	楠橋貝塚					
37	天神橋貝塚					
38	日の出橋遺跡					

参考文献

「遠賀地域の古代遺跡群」

福岡県歴史教育者協議会遠賀・中間支部

縄文貝塚の線を結んで縄文時代の海岸線を復元してみよう

（3）遠賀川下流の縄文遺跡のひみつ

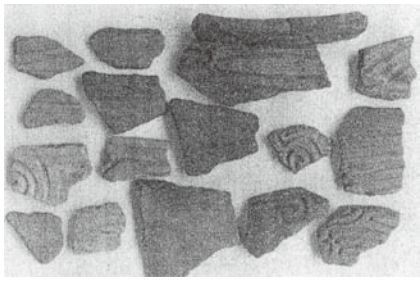
縄文時代になると遠賀川の沖積化が進み、下流域に浅い海や干潟ができると貝塚などの縄文遺跡がつくられるようになります。

遠賀川下流西側の岡垣町には1971年に「榎坂貝塚」が発見されました。4000年前の縄文時代後期の土器が多量に発掘されました。

土器は地元の鐘崎式、北久根山式土器と瀬戸内海地方で主に出土する中津式も見つかっており、九州と瀬戸内海の交流を裏付ける重要な発見となりました。

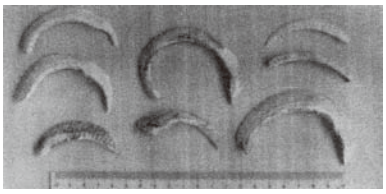
また、石器や骨角器も数多く見つかっています。

この貝塚からは当時生活していた縄文人の人骨が3体見つかっています。



榎坂貝塚出土縄文土器（糠塚区・入江茂美氏所蔵）

榎坂貝塚出土・獣骨片・貝輪未成品・貝（岡垣町中央公民館所蔵）



榎坂貝塚出土の縄文人骨（入江茂美氏所蔵）
50才前後の女性。貝輪29個を左腕に着装している。

そのうちの1体は50歳くらいの女性人骨で屈葬されたその人骨の腕には、貝製の腕輪である「貝輪」が29個着けられていました。

また、この榎坂貝塚からは、ヒスイ製の珠が発見されています。

それらを合わせて考えると、集団内に特殊な役割を持つ人が出現していたことが想像されます。生活経験豊かな長老の中に呪術者などが存在していたのかもしれません。

遠賀川下流の縄文遺跡を調べよう

（4）山鹿貝塚の人骨は語る

遠賀川の河口に近い芦屋町には「山鹿貝塚」（県指定史跡）があります。

この貝塚の特徴は、縄文時代早期から後期にかけての土器や石器がたくさん出土していることです。

また、頭につける笄（こうがい）や腕につける貝輪（かいわ）などの装身具（そうしんぐ）なども多数見つかっています。

山鹿貝塚（遠賀郡芦屋町田屋）

特に注目されるのは、合計20体を超える縄文人骨が出土していることです。これらの人骨は、乳児（にゅうじ）から熟年（じゅくねん）（40歳から60歳）までのもので、大量にある貝塚の砂に守られ、非常に良好な状態で発見されました。

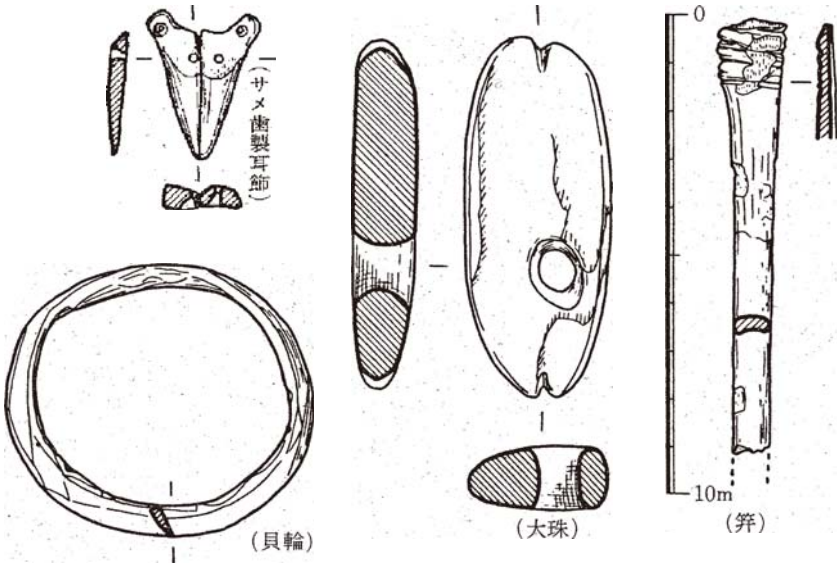
人骨の埋葬（まいそう）姿勢は、縄文時代に多く見られる手足を強く曲げた屈葬（くっそう）よりも、弥生時代に見られる手足を伸ばしたままの伸展葬（しんてんそう）が多く出土しています。

2-1 遠賀川と昔の人々の暮らし（遺跡など）

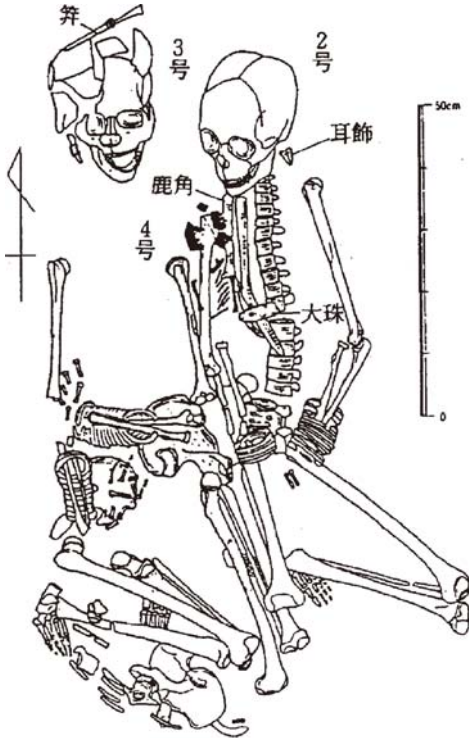
山鹿貝塚のすべての女性人骨は、貝輪を身につけていました。

中には特殊な装飾品を身につけ、集団内における重要な役割をはたしたであろう人物も埋葬されていました。

縄文社会は共同体の生業のおける計画、実行、祭りや戦闘などの集団行動の決定には、経験豊かな長老たちや呪術者が果たした役割はとても大きかったと考えられています。



山鹿貝塚出土各種装身具



山鹿貝塚の縄文人骨の出土状態
芦屋町教育委員会『山鹿貝塚』1972年より

山鹿貝塚のこの人骨は、芦屋町柏原の芦屋町歴史民俗資料館に保管されています。

芦屋町歴史・民俗資料館（歴史の里）

山鹿貝塚の人骨

芦屋町歴史・民俗資料館（歴史の里）で縄文時代の貝塚や人骨を調べよう

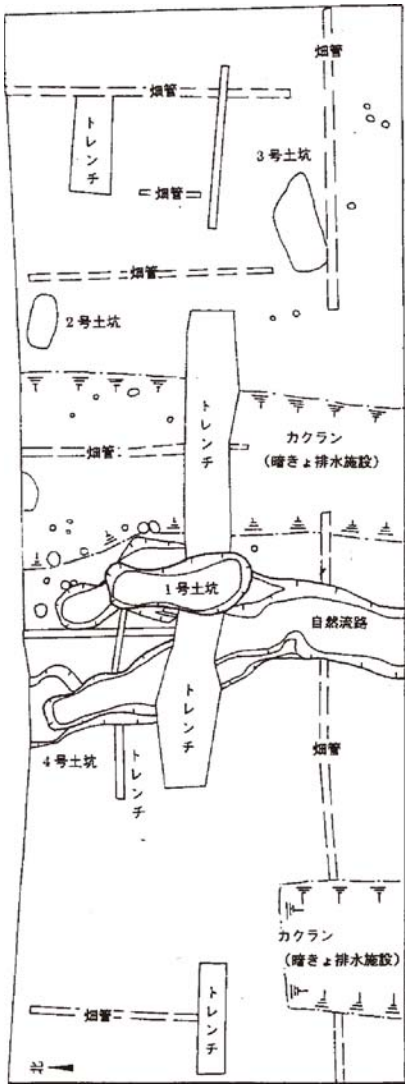
（5）遠賀平野で米づくりがはじまった

水稲耕作は中国大陸で完成し、朝鮮半島を経て北部九州に伝えられといわれています。

稲作が最初に伝わった北部九州の遺跡としては、佐賀県唐津市の菜畑遺跡、福岡県糸島市の曲田遺跡、福岡市の板付遺跡や那珂遺跡、粕屋町の江辻遺跡、福津市の今川遺跡などが知られています。

遠賀平野では、どのように米作りが始められたのかは、詳しくはわかっていませんでした。

ところが、中間市教育委員会が行った「木屋瀬田遺跡」の発掘調査（平成19年）から弥生時代前期の土器が約200点見つかりました。



その中に「夜臼式土器」とイネの収穫に使う「石包丁」が出土しています。これらは、「板付遺跡」の初期の頃の水田が見つかった突帯文期とほぼ同時期の土器であり、モミ跡も見つかっています。

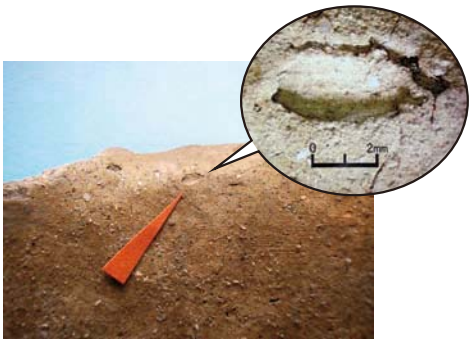
今回の発掘では、水田址や集落址は見つかっていませんが、近い将来付近から見つかる可能性は否定できません。

中間市教育委員会は、遠賀川流域でこの時期に稲作がおこなわれていたことを示す資料だということで新聞に発表しました。

木屋瀬田遺跡発掘全景

木屋瀬田遺跡出土土器

木屋瀬田遺跡1号土坑



モミ跡

また、「福岡平野で始められた稲作が、近畿などに広がっていく過程を示す貴重な遺跡の発見だ」としています。

遠賀川下流域での稲作の始まりを調べよう

（6）遠賀川川床から発見された砂山遺跡

砂山遺跡は、芦屋の海岸から10キロメートルほどはなれた上流の、遠賀平野の微高地に立地しています。

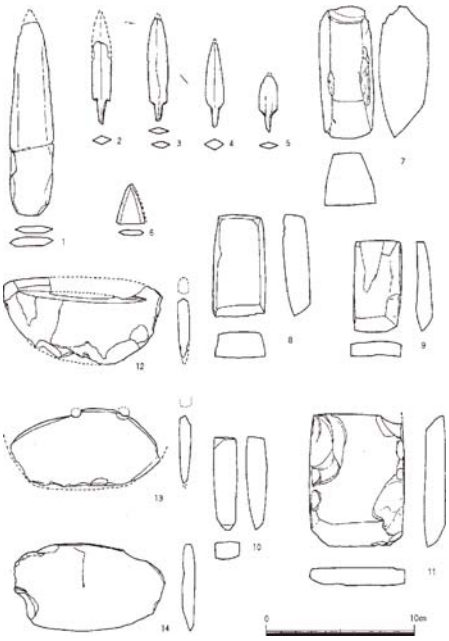
この遺跡から初期稲作農耕文化と関係が深い大陸系の磨製石器や夜臼式土器、板付Ⅰ式土器が発見されています。大陸系磨製石器は、初期の稲作農耕で使われた石器です。中国の東北区・朝鮮半島や北部九州などから出土しています。

これらの特徴として、刻目突帯や貝を使って器面調整を施したもの、口縁部を突帯のように整形したもの、器面に刷毛目調整を施したものが挙げられます。

また、石器は頁岩製の磨製石剣、有茎式柳葉形磨製石鏃、ホルンフェルス製の磨製の柱状片刃石斧、大小の扁平片刃石斧、石包丁（石製の稲の穂摘み具）があります。

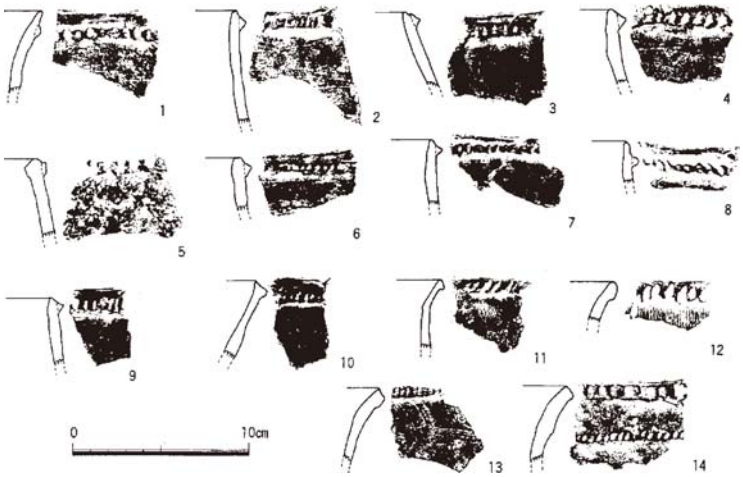
石包丁は刃から背までの距離が長く、ズングリした形をして、古い特徴を示しています。朝鮮半島の南部や唐津市の菜畑遺跡から出土したものと非常によく似た擦切溝状穴石包丁も含まれており注目されます。擦切溝状穴石包丁は、米作りを始めた頃の石製の稲の穂摘み具だと考えられています。

この遺跡からは、水田址や炭化米などは現在のところ発見されていませんが、玄界灘沿岸の初期稲作農耕遺跡とほぼ同じ時期に大陸系の磨製石器を含む初期稲作農耕を取り入れた可能性は強いと考えられます。



中間市砂山遺跡出土石器
（「地域相研究」19号）より

中間市砂山遺跡出土土器



中間市砂山遺跡出土土器（砂山遺跡から出土した刻目突帯文の土器）

なぜ、砂山遺跡から大陸系の磨製石器がまとまって出土したのだろう？

（7）磨製石剣のふるさと遠賀平野

石を磨いて作った磨製石剣は、中国の東北地域・朝鮮半島・日本列島に分布しています。

それらは青銅器や鉄器などの金属器を真似したものと考えられています。磨製石剣は有茎式（柄が無いもの）と有柄式（柄がついたもの）に大別されます。

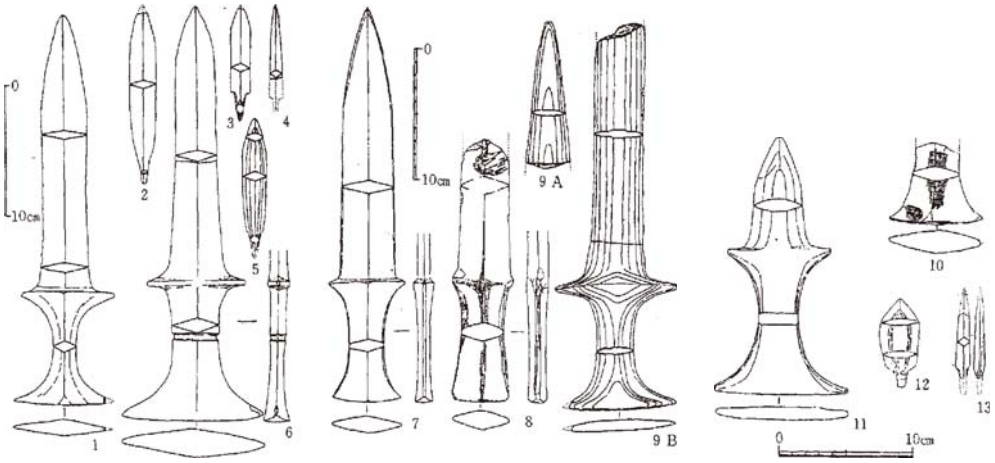
このうち、有柄式磨製石剣は対馬と福岡県に多く出土していますが、特に遠賀川下流の中間市とその周辺に集中しています。

そのことから、遠賀平野は朝鮮半島から初期稲作農耕を縄文晩期に受け入れた、地域であったといえるかもしれません。

一般には、磨製石剣などは唐津や福岡に伝わったといわれていますが、遠賀川流域にも直接、磨製石剣などが朝鮮半島から伝わったといえるかもしれません。

中間市内出土磨製石剣

遠賀川から「垣生遺跡群」を望む



1.中間市垣生（中間中学校校庭）
2.中間市垣生（岡部邸）
3.中間市垣生（岡部邸）
4.中間市垣生（岡部邸）
5.中間市垣生（岡部邸）
6.中間市垣生（岡部邸）
7.中間市御館山遺跡
8.中間市御館山遺跡
9.A、9B.中間市垣生猿喰
10.中間市中曽根遺跡
11.中間市上底井野遺跡
12.中間市垣生遺跡
13.中間市垣生遺跡

中間市内出土磨製石剣・石鏃（「地域相研究」19より）

なぜ、遠賀川下流域の中間市周辺から初期の大陸系磨製石器が出土するのだろう？

（8）遠賀川式土器のふるさと立屋敷遺跡

遠賀川の下流の遠賀郡水巻町立屋敷に立屋敷遺跡があります。西鉄バス停立屋敷で下車後南に5分ほど歩くと、遠賀川の堤防に大イチョウが見えてきます。そこに、「稲作文化発祥の地、立屋敷遺跡あと」の看板があります。堤防をはさんだその一帯が立屋敷遺跡です。遠賀川河口堰の建設に伴い、そのほとんどが、水没してしまっています。

1931年、この場所で、地元の考古学者の故名和羊一郎氏によって、弥生時代の「有紋式土器」が発見され、「遠賀川式土器」として学会の注目をあびることになりました。

1940年、東京考古学会の調査で、「弥生時代前期の水稲耕作を主とした集落遺跡」であると発表されました。しかし、弥生時代前期の水田や集落の址は確認されていません。

1952年、この遺跡が、鉱害復旧工事の採土地となって、破壊され、弥生時代後期の数多くの遺物が出土しました。土器類、木器類、井戸枠、住居あとも発掘されています。

1994年、渇水の為、遠賀川の中に水没していた遺跡の一部が露出しました。盗掘のおそれがあるため、水巻町教育委員会による緊急発掘調査が行われました。その調査によって、弥生後期の土器の包含層やドングリの貯蔵穴が発掘されました。ドングリの貯蔵穴からは、たくさんのドングリの他、ヒョウタンなども見つかっています。

この遺跡の南側には、伊左座遺跡や弥生時代の小型の鏡が出土した上二貝塚があります。

立屋敷遺跡からは、現在のところ、水田のあとは見つかっていません。しかし、この立屋敷遺跡の近い場所に弥生時代前期の集落の跡が埋もれている可能性があります。

近い将来、本格的な学術発掘などが行われれば、発見されるかもしれません。米作りをはじめた弥生時代のムラのひとつである立屋敷遺跡は、まだ、謎に秘められたままです。

立屋敷遺跡案内板

立屋敷遺跡説明板

遠賀川式土器

弥生時代の遠賀川式土器のルーツを調べてみましょう

（9）遠賀平野の大型古墳

遠賀地域でも古墳時代になると大型古墳がつくられようになりました。その数はけっして多くはありませんが、遠賀川の下流にも地域を代表するような首長があらわれたことが想像されます。3世紀から4世紀にかけての首長墓（地域首長の墓）は、まだ明らかになっていませんが、中間市の上り立や八つ広、北九州市や八幡西区の馬場山や馬責場などの墓地構成や出土した後漢鏡などの遺物からみて、遠賀川下流地域の集団間に一定の格差が生じてきたことがうかがえます。

4世紀代になると、集団間の格差がはっきりと現れてきます。弥生時代の後半期のいくつかの「戦い」を経て、地域がまとまり、いくつかの地域が集まって小さな国となりました。

古墳の形や大きさで首長の力の大きさが分かります。古墳の形は、前方後円墳、円墳、方墳などがあり、大きさもさまざまです。

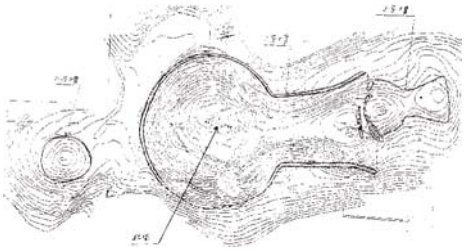
遠賀地域には、4つの前方後円墳が見つかっています。岡垣町の磯辺１号墳(全長60m）、塩屋古墳（全長72m以上）、遠賀町の島津丸山古墳（全長57m）、豊前坊1号墳（全長74m）です。

その下位には、岡垣町の東部の高丸古墳や芦屋町大城の大塚古墳、鞍手町の剣神社古墳群などの大型円墳があります。さらに規模が小さい中間市の「上り立」、「馬場山」、「天神山」などの諸古墳が4世紀から5世紀前半にかけてつくられました。

これらの中小首長をはるかに凌いで、遠賀地域集団の最高首長として、岡垣町の大型の前方後円墳や遠賀町の前方後円墳などもほぼ同じ時期に現れてきたのです。

遠賀地域の最高首長として君臨する前方後円墳の被葬者は、西日本に広範にわたって成立している政治同盟の一員であったと考えられます。その政治同盟の証として大型前方後円墳を造れたのです。

4・5世紀の古墳分布



豊前坊古墳群　遠賀町教育委員会

参考文献「遠賀地域の古代遺跡群」

「岡垣町史」原始古代編より

遠賀地域の大型古墳を見学して、調べてみよう

（10）遠賀川河口と古代山鹿氏

遠賀川河口の遠賀郡芦屋町には、「山鹿」という地名があります。

歴史が古代から中世へと移る時、遠賀川河口で栄え、平氏と運命をともにした山鹿氏がかつて栄えていた場所と考えられています。

それではその歴史をみなさんと探ってみましょう。

「平家は千余艘を三手につくる。山鹿の兵藤次秀遠五百余艘で先陣にこぎむかふ。松浦党三百余艘で二陣につづく。平家の君達、二百余艘で三陣につづき給ふ。兵藤次秀遠は九国一番の勢兵にてありけるが、…」

上の文章は、「平家物語」の中の源平最後の戦いとなる壇ノ浦の合戦の様子です。山鹿兵藤次秀遠が、どうしてこんなに力を持つようになったのでしょうか。

山鹿氏の先祖が、粥田一族であり、現在の筑豊一帯に勢力を広げて行ったとする説があります。

また、保元3（1158）年平清盛が大宰大弐になってから、高麗や宋との貿易がますます盛んになりました。

そのため、遠賀川流域には粥田一族の多くの荘園が存在していました。年貢米は、京都の貴族達から「鎮西米」と呼ばれ喜ばれていました。古代から芦屋は、島門の駅（大宰官道）と関係が深く交通の要衝で、陸海路とも人馬や船の往来で賑わい文化も栄えていました。遠賀川の流域から集められた年貢米は、山鹿で大きな船に積み替えられ京都に運ばれました。

また、山鹿氏は、関門に至る間の船の警備と水先案内を行い、通行料を徴収しました。

大宰府の役人はもちろん九州の武士までが、平氏と主従関係を結ぶようになると、山鹿兵藤次秀遠は平氏の主従関係をますます強めていました。京都を追われる平氏を助け、大宰府から安徳天皇を迎え入れた秀遠は、一の谷の合戦や屋島の戦いに水軍を派遣しています。屋島の戦いに敗れた平氏が、最後のよりどころとしたのは九州でした。

しかし、九州でも源氏方につく武士団が現れ情勢は一変していきました。

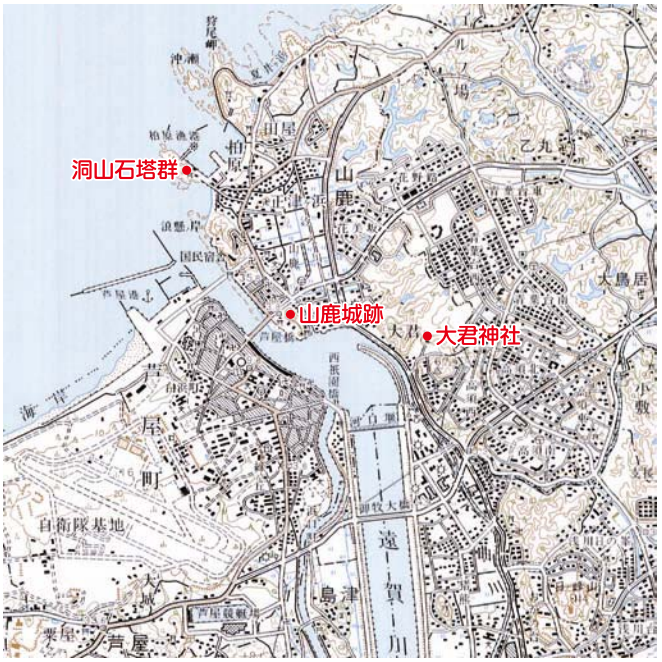
壇の浦の戦いは、文治元（1185）年3月24日早朝、汐の流れにのって平氏の攻撃によって火蓋がきられました。秀遠の奮戦などもあって初めは平氏が優勢でしたが汐の流れがかわり、午後3時頃から形勢は逆転して、戦いは源氏の勝利で夕刻に決しました。

平家と運命を共にした山鹿秀遠らは、源頼朝の厳しい追及を受け、広大な領地も没収されてしまいました。「秀遠は、伊勢に潜行し平盛国に従いその地で没した」（「家譜」山鹿素行）と言う説がありますが定かではありません。

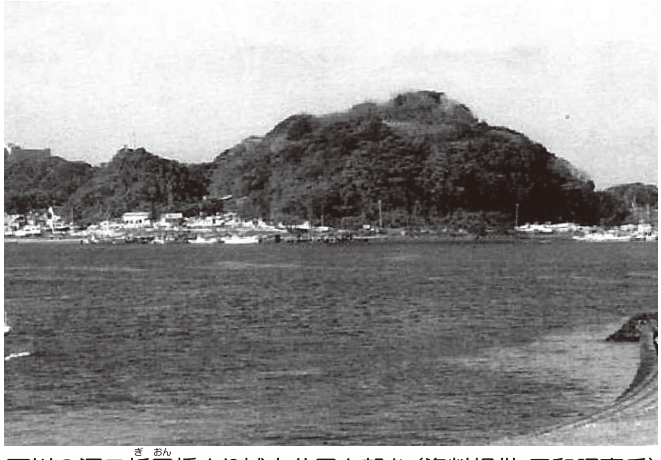
その後、山鹿には宇都宮一族と言われる麻生氏が、関東（下野国）から地頭として派遣されました。

※地頭 … 東下りのもの＝下り衆
※山鹿氏から麻生氏代々の居城であった山鹿城は、豊臣秀吉の時代に廃城となりました。

古代山鹿氏と関係が深い大君神社（資料提供 田和昭壽氏）



「この地図は、国土地理院発行の5万分の1地形図（折尾）を使用したものである。」



西川の河口祇園橋より城山公園を望む（資料提供 田和昭壽氏）

山鹿兵藤次秀遠が奉納したと伝えられる狛犬
（水巻町指定文化財 八劔神社蔵）

参考文献（「子どもと楽しむ福岡県歴史資料集」より）

芦屋河口で栄え滅びた古代山鹿氏の歴史を調べてみよう

（11）遠賀川河口で作られた芦屋釜

古代から港町として栄えた芦屋・山鹿（現芦屋町）では、14世紀頃から鉄製の茶の湯釜が作られていました。

室町時代に京の公家、武士、僧侶の間でもてはやされて、全国に天下の名釜として知れ渡りました。国内でも最高の美術品として評価が高い、芦屋釜について調べてみましょう。

①そのような優れた茶釜が、なぜ、芦屋で作られたのでしょう？

理由は３つ考えられています。

1）鋳物に使える土が遠賀川河口に堆積していた

2）金属溶解のための大量の木炭を遠賀川の水運により運搬できた

3）大きな港であり、地金の供給や製品の運搬がし易かった

また、国内外の文物が流入する中継地であった芦屋の地理的、文化的背景があったこともあります。

芦屋霰地真形釜
（芦屋釜の里）

②いつ頃作られたのでしょうか？

作品に刻まれた銘（名前や年代）を調べると、芦屋鋳物師の作品と思われるものは、一番古いもので1356年（室町時代）の鐘、一番新しい物で1600年（戦国時代末）の鐘が分かっています。芦屋釜もこの間に作られたと考えられます。

③どのように作っていたのでしょうか？

作業は、次のように進められたと思われます。

1）釜の形や文様を考えて鋳型を作る

2）炉に木炭と鉄を入れ、鉄を溶かす

3）鋳型に流し込む

4）仕上げる

近年、芦屋鋳物師の工房跡である「金屋遺跡」から室町時代の鉄を溶かす炉「こしき炉」が発見されています。

鋳物を作る職人のことを、鋳物師（「いものし」又は「いもじ」）と言います。作品に刻まれている銘から、次の人の名前が分かりました。

・大江宣秀、大江貞盛、葦屋行信、大江長野壱岐守貞親など…

次の物が現存しています。

1）釜（湯沸し）…今も茶道で使う
2）鰐口…神社の拝殿・仏堂の前面の軒につるす大きな鳴り物
3）鐘…鐘つきの鐘
4）鉄香炉…香を入れてたく器具
5）仏像…高倉神社（岡垣町）の「毘沙門天像」など

毘沙門天像

④どうして全国に広まったのでしょうか？

それは、次の理由が考えられます。

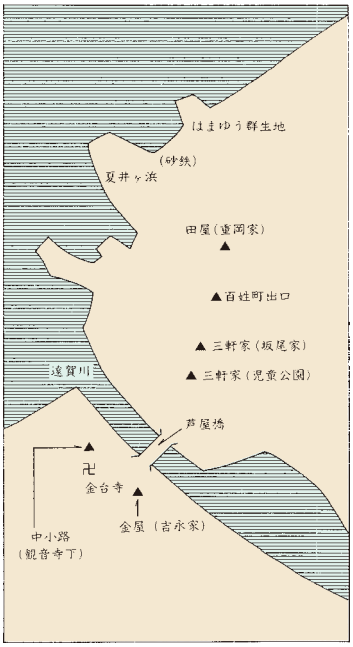
1）茶の湯が盛んとなり、美しい文様をもつ釜が求められたこと
2）釜の肉厚が薄く湯が沸きやすいので茶の湯の釜として最適であったこと
3）北九州の荘園領主が釜を本家に寄進したことや戦国大名が保護したため

⑤全国に広がったのにどうして作られなくなったのでしょうか？

一番の理由は、保護・援助していた大内氏・麻生氏が滅亡してしまったことです。

次に、わび茶の隆盛により、質素な風合いの釜が好まれるようになったことや京都三条での釜の製作が盛んになったことなどが挙げられます。

芦屋町は、茶の湯釜の名器として一世を風靡した芦屋釜の復興や、茶の湯の文化の振興を図るとともに、人々の安らぎの場となることを目指して、1995年5月1日に「芦屋釜の里」を建設しました。



芦屋関連遺跡の分布図
（▲は鉄滓の発見場所）

芦屋釜鋳造跡（吉永家）

子どもと楽しむ福岡県歴史資料集、芦屋釜一室町の名器再び一、小・中学生用 芦屋釜の図録 より　（資料提供 田和昭壽氏）

芦屋釜の里に行って実物を見てみよう

（12）江戸時代前後の遠賀川と洪水

江戸時代のはじめ頃、今からおよそ400年前の遠賀地方の絵地図をよく見てみよう。不思議なことに、遠賀川には、2つの流れがあります。

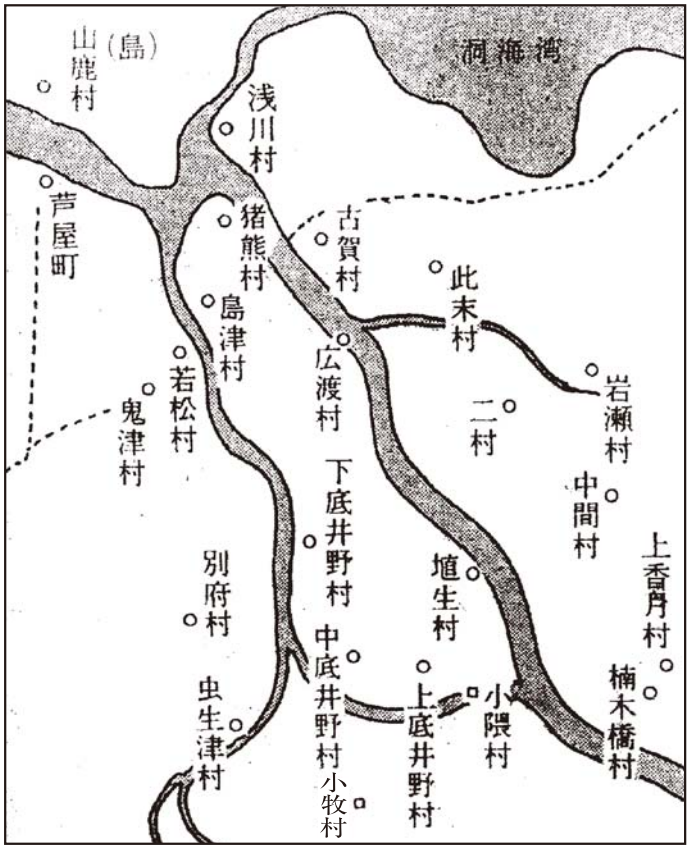
1つは、中間市～水巻町を流れるコース、もう1つが、中間市の下大隈～上底井野の横を通って現在の西川の方へ流れていくコースです。

その当時の遠賀平野では、激しい雨が続くと、遠賀川の水があふれ出して大洪水となっていました。

特に2つの川に囲まれたところでは、毎年のように洪水が起こり、農作物や農民が住む家にも大きな被害が出ていました。

時にはイネや野菜が流されるだけでなく、家や人や馬や牛も流されてしまうのです。洪水の後には疫病や飢え死にする人がでました。

川が2つに分かれていることや川がクネクネ曲がっていることで、その被害はとても大きなものになっていました。



江戸時代の初めころの絵地図（「中間市史」上巻より）

困った農民は、当時の福岡藩に「どうにか洪水をなくしてほしい」とうったえました。藩にとっては米どころの遠賀地方はとても大切な場所でした。

藩では何回も遠賀地方に役人を送り、被害を調べたり、どうすれば洪水を防ぐことができるのかを研究しました。

藩主黒田長政や家老の栗山大膳までも遠賀郡に視察に来て、遠賀川堤防の大改修の計画を立てたと記録されています。

そこで、藩は、遠賀郡や鞍手郡の農民10万人を動員して遠賀川の大改修工事にとりかかりました。

この工事の計画は、遠賀川の二つの流れの一方をふさぎ、一つの流れに変え、高さ2.7メートルの丈夫な堤防を築き、余った水は、新たに掘った堀川で洞海湾に流すという壮大なものでした。

しかし、この壮大な工事は、洪水に苦しんできた福岡藩や下流域に住む村人にとって、とても重要な工事となりました。

☞関連する内容を8ページでも紹介しています。

遠賀川の洪水の歴史と人々の暮らしの変化を調べてみよう

（13）堀川の歴史を探る

①堀川って何だろう

江戸時代に福岡藩によって掘られた運河で、北九州市八幡西区の楠橋の「寿命」から「中間唐戸」、水巻町の吉田、折尾を通って北九州市若松区の洞海湾まで、12キロ続いています。

かつては、流域の人々の生活を支える貴重な運河でした。当時の人々は、この堀川のことを宝川と呼ぶほど、地域の人々に親しまれた川でした。

吉田車返付近（水巻町）

吉田御輪地付近（水巻町）

●堀川位置図

②堀川がなぜ、掘られたのでしょう？

江戸時代の遠賀川には、今のようなじょうぶな堤防はなく、大雨のたびに、洪水を引き起こしていました。そのため、遠賀郡や鞍手郡の村々では、農作物の大きな被害がでました。

そこで、洪水であふれる水を洞海湾に流して被害を防ぐためにつくられました。

③第1期工事（工事の失敗）

1621年、福岡藩家老の栗山大膳を責任者にして、堀川の工事がはじまりました。工事には、遠賀郡の農民がかりだされました。

吉田村宮尾付近の工事では、地盤が悪いため、土砂くずれなどがたびたび起こり、死者もでました。農民たちは「貴船神社のたたりだ」と言って騒ぎ出しました。

1623年、福岡藩主の黒田長政がなくなり、とうとう堀川の工事は、中止になってしまいました。

この工事でできた堀を当時の責任者の名前をとって「大膳堀」とよんでいます。現在の福北ゆたか線（筑豊本線）のところにそのなごりが残っています。

また、「大膳」「大膳橋」などの地名が現在も使われています。

④第2期工事（車返の岩山工事）

1751年5月に堀川の工事が再開されました。この工事では、農民たちの反発をおさえるために、吉田村宮尾付近の工事をあきらめ、吉田村車返の岩山を切り貫くことにしました。車返の切り貫きの工事では、郷夫と呼ばれる石工事の専門家が活躍しました。1757年9月に切通しが貫通しました。

しかし、川幅が狭いため、これを広げる工事がさらに行われて、1759年に工事が完成しました。さらに、金山川へとつなぐ工事が進められ、1762年に終了して洞海湾まで通じました。

この工事は、工事参加者には、賃金を払う、農閑期に工事を行う、工事は急がないなどの方針を決めて進められました。

⑤第3期工事（中間唐戸の完成）

遠賀川から水を引き入れるため、中間村の屋島付近で数回の仮通水をしました。しかし、地盤が弱く、水の勢いに押され、水門が壊れてしまいました。

そこで、場所を中間村の惣社山に変更して新しく水門をつくる工事が行われました。この時、底井野村の久作という人がその工事の責任者に選ばれ、備前国（現在の岡山県）の吉井川の石唐戸を視察しました。

1762年にようやく水門が完成しました。これが中間唐戸です。

⑥第4期工事（寿命唐戸の完成）

遠賀川から堀川への水の流れ込みを増やすために遠賀川の水を堰き止めてしまったため、上流地域で湿田化が起こってしまいました。そのため、堀川の取水口を上流の楠橋村に移すことになりました。工事は1804年2月に始められ、6月下旬には、完成しました。

この工事は、取水口と笹尾川を結び、取水口近くに水門をこしらえるというものでした。これが「寿命唐戸」です。

現在の中間唐戸水門（中間市）を調べる子どもたち

中間唐戸や河守神社を見学して「遠賀・堀川」の秘密を調べよう

（14）遠賀川下流の村と享保の大飢饉

水巻町下二の水巻幼稚園のそばの墓地にとても古い供養塔があります。

地元の人々は、その塔を「飢人地蔵」と呼び、その塔を今も大切に祀っています。

さて、なぜ飢人地蔵がつくられたのでしょうか？どうしてその場所につくられたのでしょうか？その謎を探ってみましょう。

今から、300年近く前の1732年（享保17年）2月からふりはじめた雨が春になってもやまず、気温が高くなってくるにつれ、ウンカやイナゴなどの害虫が大発生し、多くの稲が枯れてしまいました。そのため、米の収穫がなく、飢え死にする人があとを絶ちませんでした。

福岡藩では、この時、人口36万人の内、およそ10万人から15万人もの人々が飢え死にしたといわれています。

水巻一帯では、1732年の5月16日、大洪水が起こり、二村の堤防が切れ、村々では、田植えができず、また、わずかに田植えしたところも、井戸が水枯れしてしまいました。

5月28日、ようやく雨がやみ、田植えをしましたが、7月に害虫が大発生して稲の株は残らず枯れてしまいました。

人々は、魚、鳥、家畜、雑草など食べられるものは何でも食べつくし、中には、畳をほどいて、そのわらをせんじて飲む人もいたそうです。

親子でまくらをならべ、家に火をつけて自殺した人もいました。飢え死にした死体は竹藪や池の淵に捨てたと伝えられています。

当時の立屋敷村では、人口126人の内、飢え死にした人は、半年で42人にのぼり、藩により粥が施されることになりました。その人々を供養するために、供養塔がつくられたそうです。

今では、当時を偲ぶものは、風化しつつありますが、かろうじて、二股に分かれた「ナノミの木（ネズミモチ）」と石碑が残されています。

遠賀郡水巻町下二の幼稚園そばの墓地の中にある飢饉の供養塔（飢人地蔵）

焼け石に水の〝お救い小屋〟

享保の大飢饉について調べてみよう

（15）遠賀川下流の村むらを救った偉大な発明

今から300年以上も前のことです。福岡藩の農民たちは、稲作をするのに、洪水や日照りの害だけでなく、稲につく害虫にずいぶん悩やまされていました。害虫が発生すると、夜通し松明をたいて、鐘や太鼓で追い払うしかありませんでした。これを「実盛おい」といいました。

ウンカなどは簡単に駆除する方法は見つかっておらず、時には、稲が全滅することもありました。また飢饉になってしまうこともありました。

ところが、福岡藩の遠賀郡立屋敷村の藏富吉右ヱ門が1670年ごろ、ウンカなどの稲の害虫を退治するとても画期的な方法を考えついたのです。彼が77歳のときでした。

その方法は、竹筒の中に「くじらの油」を詰め、その油を田んぼの水面にまんべんなく流します。次に稲の葉や茎についた害虫を竹ざおではらい落とします。油の上に落ちたウンカなどの害虫は、やがて窒息して死んでしまいます。

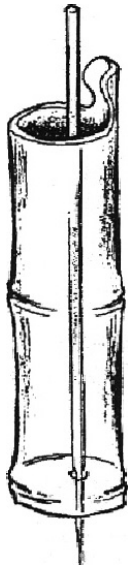
しかし、この駆除法はなかなか広がりませんでした。そこで、吉右ヱ門は、「これは神のお告げである」と地元の農業の神である「保食宮」を利用して宣伝につとめたといわれています。福岡藩内でなく、その後は中国・四国地方まで、この方法は広められました。

特に、彼の死後60年後の「享保の大飢饉」では、ウンカやイナゴなどの害虫の駆除に大いに力を発揮したといわれています。

このウンカなどの駆除法は、農薬が普及する前の1950年ごろまで、西日本各地の農家で行われていました。

トビイロウンカ（長翅型）
（福岡県病害虫防除所原図より）

蔵富吉右ヱ門の墓は、遠賀郡水巻町立屋敷の長専寺内の墓地にあります。（JR鹿児島本線の水巻駅下車、遠賀川の土手のほうに向かって15分ほど歩いたところです。）



▲油まき器（図示）

江戸時代の人々は、どのような方法で、イネの害虫を駆除したのか調べよう

（16）三里松原の植林

福岡県遠賀郡の芦屋町や岡垣町などの浜辺の村々では、江戸時代、飢饉だけでなく、響灘からふきよせる大風に悩まされていました。

海から吹く風のため、田んぼが一晩で、砂に埋まってしまったり、せっかく作った米や野菜が潮風のせいで枯れてしまったりすることもありました。農作物の不作は、当時の福岡藩の財政にもひびきました。

そこで、藩では享保の大飢饉後の対策として、遠賀郡と同じような砂浜がある宗像・粕屋・志摩（現在の糸島）に大がかりな松の植林を命じました。

1738年4月、遠賀郡の浜辺の村々から人夫が出て、松苗の植え立て作業が始まりました。

藩の役人は、「以前は、松原が立ちしげっていたのに、御用材として切ったり、また、農民が自由に切り荒らしたりするので、砂で埋められる田畑が多く、損亡がひどいので、新たに田畑囲いのための松の植え立てをすることにした」と農民たちに達しました。

また、「百姓として、松を切り荒らしたものは、重い罰をあたえる」と厳しく戒めました。さらに「松が枯れてしまったところは村々で年々松を植え継ぎ、手入れをおこたらず、下草も切らぬようにせよ」とも命じました。

1751年、芦屋町から岡垣町の手野・内浦あたりまでの浜山の松の植え立てが計画されました。

その区域は、芦屋・糠塚・黒山・松原の四ヶ村で、植え立ての坪数は約72万坪で、それぞれの村が坪割りで受け持ち区域を担当し、松を植え立てることになりました。

芦屋は浜山植立奉行権藤伊右衛門が責任者となり、1752年に着手して、1758年までに、一応の植え立てが終わりました。

2-1 遠賀川と昔の人々の暮らし（遺跡など）

一坪に二尺（60cm）以上の松苗一本ずつ、また、三尺四方ごとに根芝を植えさせました。

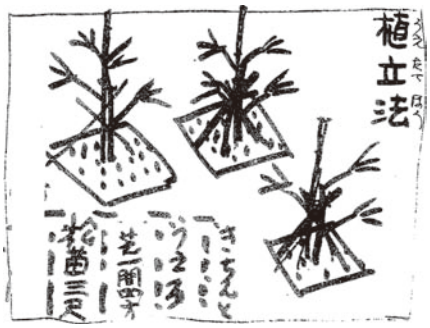
小さな松苗は、砂地には、なかなか植えつかないので、大ぶりの苗を必要としましたが、遠くから取り寄せるのでは、費用がかかるということから、四ヶ村でまかなうことにしていました。

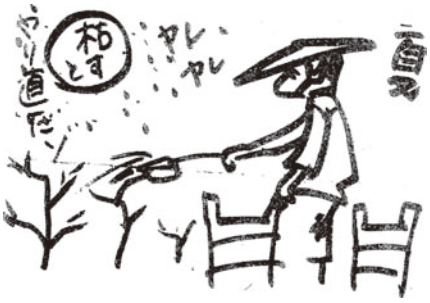
しかし、潮風が強いため植えつかない松苗もありました。そこで、藩では、1760年から1年にわたって、地元の農民2300人を使役して、さらに根芝をうたせました。また、「受け持ち区域の村々は、常々見回りをおこたらず、もし、松苗・根芝が砂にうずもれたり、枯れたりした場合は、その年の坪割りのほかに臨時に植え立てさせるから心得よ」と達しました。

三里松原の松の植え立ての作業は、23年間も続きました。遠賀郡の農民たちには、とてもつらい作業が続きましたが、少しでも暮らしがよくなればという気持ちで頑張り続け、三里松原の植え立ては一応終わりました。

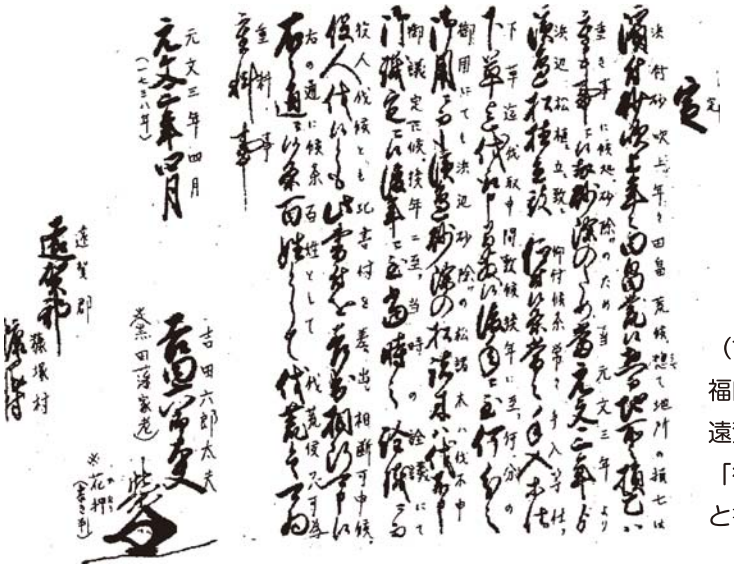
松原を守るために、藩の家老、吉田六郎太夫が出した「御書付」には、「後年いかなる事情があっても、松を切ってはならぬ、切ったら、重罰に処す。役人が切ろうとしても、この書付けを見せて断ること」と書いてありました。

農民たちは、数百年にわたってこの三里松原を守り育て続け、三里松原は、農民たちの命の森となりました。





（さし絵 戸次拓治氏提供）



（古文書資料 入江東樹氏提供）
福岡藩家老の吉田六郎太夫が
遠賀郡糠塚村の村人に当てて出した書付
「役人が松を切ろうとしても、この書付を差し出して断る」
と書かれています。

三里松原はどのようにして植林されたのか岡垣町史などで調べよう

（17）一部が伐採されてしまった三里松原

三里松原は、農民たちによって江戸時代から、数百年にわたって守り育てられてきた「命の森」です。

この松原のお陰で、遠賀平野の農作物は塩害から守られてきました。また、三里松原のもたらす自然の恵みは地元の農民たちの貴重な食料にもなってきました。

しかし、その三里松原に陸軍の飛行場を建設する計画がたてられ一部が伐採されてしまいました。

三里松原は、戦争時代に重要な地区とされた小倉、八幡などに近く、航空機を迎え撃つのに最適な場所だということで選ばれました。

1939年11月13日、三里松原で、陸軍芦屋飛行場建設の起工式が盛大に行われました。その工事は、小学校の高等科や中学校や女学校、青年団、各種団体などが奉仕団をつくり、土木作業を行いました。

また、遠くから動員された人々は、芦屋小学校などに泊まりこみで協力をさせられました。松の伐採方法は、すべて人の手による「手引き大のこ」で行われました。

このようにして三里松原の一部が伐採されてしまったのです。

芦屋基地内の説明板

飛行場の建設工事
（芦屋町制百周年記念誌より）

今も10基をこえる掩体壕が芦屋基地内に残っています。

建設途中の陸軍芦屋飛行場（芦屋町制百周年記念誌より）

三里松原の一部はどのように伐採されて芦屋陸軍飛行場が建設されたのだろう？

（18）再び伐採された三里松原

第二次世界大戦が終わると、アメリカ軍が芦屋飛行場に進駐（敗戦した日本を占領するため）してきました。

そして、今度は岡垣町側の三里松原を切り開いて、射爆撃場をつくり戦争の訓練を始めたのです。三里松原や地域住民はどうなったのでしょうか？

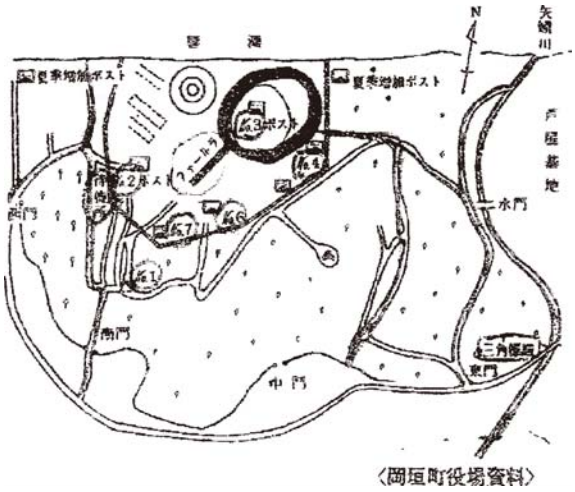
朝鮮戦争やベトナム戦争の時には、戦場の地形と三里松原の地形が似ていたため、実戦訓練場にされていました。

ベトナム戦争の時にも、アメリカ軍は、ベトナムに地形が似ている岡垣射爆撃場で実戦訓練を行いました。

その訓練が激しくなると、アメリカ軍の練習機による誤射や誤爆が続発しました。岡垣町の農民が、田植えをしているところに機銃弾がうちこまれたり、遠賀病院（現岡垣病院）のすぐそばに、ジェット機が墜落したりしました。

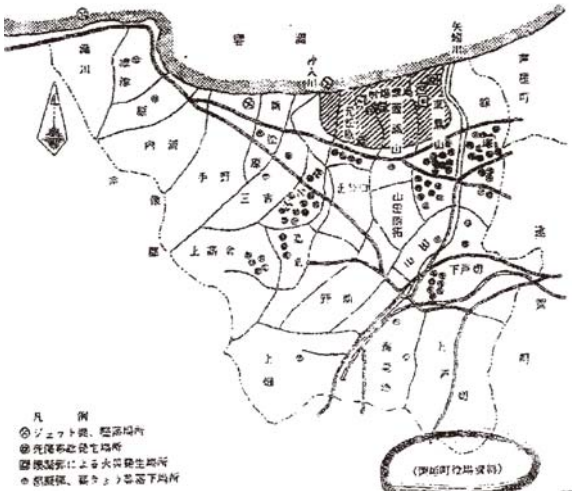
わかっているだけで、射爆撃場での事故は、25年間で111回も起こされたと記録されています。

地域の住民は、事故や騒音などをがまんし続けていました。安心して暮らせる日が訪れることを夢みながら…。



〈岡垣町役場資料〉

岡垣対地射爆撃場見取り図



射爆撃演習事故分布図

●事故の種別

事件	件数
薬きょう落下	59
模擬爆弾落下	17
火炎	15
実弾落下	8
飛行機墜落	3
機銃掃射	3
異常爆発	3
爆風被害	2
不発弾爆発	1
合計	111

（昭和25年10月～51年5月）

（岡垣町役場資料より作成）

模擬爆弾

どのようにして三里松原に射爆撃場がつくられたのでしょうか

（19）緑の松原と青い海をとりもどそう

「もうこれ以上、射爆訓練の的になるのは、がまんできん」
「射爆訓練の騒音で、夜勤明けも眠れない」
「子どもたちを守るためには、射爆撃場をなくすしかない」
「子どもたちを守るために母親の会つくり立ち上がりましょう」

がまんに、がまんを重ねてきた地域の人々は、とうとう射爆撃場撤去の運動に立ち上がりました。

その時、人々は、「三里松原」という歌を口ずさみながら、射爆撃場撤去のたたかいを続けたといいます。

三里松原
まもり、そだてよう、ひろいうみ、あおいそら
まもり、そだてよう、しろいすなはま、みどりのまつ。
わたしたち、そせんからゆずりうけた　たからもの。
こに、まごに、ゆずりわたす　たからもの

15年以上続いたその運動の結果、1978年6月7日、岡垣射爆撃場が撤去されました。ようやく三里松原に平和がもどってきたのです。今、射爆撃場の跡地には、松の苗が植林され、スクスクと育っています。

「これで、夜勤明けの人も、赤ん坊もよう眠れる」
「田んぼでも、安心して、仕事ができる」
「ニワトリも卵をいっぱい産むようになる」

緑の松原と白い砂浜、そして、青い海を岡垣町の地域住民がやっととりもどしたのです。宝物ような三里松原を守りぬいたのは、三里松原とともに生きてきた地域の人々のすばらしいたたかいがあったからです。

岡垣射爆場

ぼくの住んでいるところは、海に近い農村です。空気もすんでいるし、自然もこわされてなく、平和なところだ。

しかし、一か所だけ、とてもこわい所がある。それは射爆場だ。ぼくは海が大好きだから、ときどきそこに行く。いつ行っても、「危険」という立札が何本も立ちならび、はり金をはりめぐらしている。

いつからこうなったか、ぼくははっきり知らない。

この海岸の松原は、ぼくたちの祖先が、「自分たちの松原だ」と、守り育ててきたと聞いている。

今まで、この海で思いきり、のびのびと安心して泳いだり遊んだりしてきたが、いまはだめだ。

岡垣町は、ずいぶんこの射爆場でなやまされている。ジェット機がとびはじめると、聞こえるのはジェット機の音だけだ。テレビの音はうち消され、家の人との会話もできない。

小さいころは、ジェット機がとんでくるたびに、ものすごい爆音に大声で泣いたものだ。その泣き声も家の人には聞こえない。今でも、ジェット機が飛んでくると身ぶるいする。

ぼくが幼稚園に行っているころ、家の玄関から一メートルくらいのところに爆弾が落ち、煙が出ていた。さっそく区長さんにとどけると、けいさつや役場、新聞社の人たちが調べにきた。最後に自衛隊がやってきて、その爆弾をもって帰った。あのとき爆発していたら、ぼくの家や家庭は傷つき、大変なことになっていただろう。

これにに た事故はたくさんあった。祖父の話によると、山や畑にも爆弾が落ちて、農作業も安心してできない。養けい場のにわとりも、タマゴを生まなくなったそうだ。

今までがまんしていたが、今では反対運動がおこっている。岡垣町に住んでいる人たちは、今「射爆場をやめろ」と運動をしている。

昔のように安心して遊ぶことができ、住めるところにしてほしい。ぼくたちが、射爆場のぎせいになることはない。一日も早く、緑の松原、青い海をかえしてほしい。

当時の小学校６年生が書いた作文（「子ども日本風土記」より）

2-1 遠賀川と昔の人々の暮らし（遺跡など）

平和になった三里松原（さんりまつばら）の吉木（よしき）が浜（はま）には、おおよそ２年ごとにアカウミガメが産卵に訪れるようになり、地域住民から見守れながら赤ちゃんカメが響灘（ひびきなだ）にかえっていく姿もみられます。

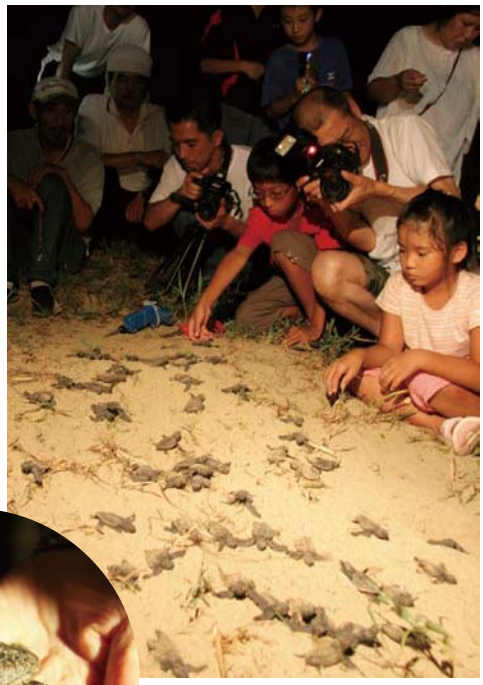
岡垣射爆撃場年表（町史）

昭和　月・日

２２年　８米軍対地射爆場開設
（１９４６年）
２６年　３　米軍防風保安林伐採
　　射爆撃場拡張整備
２７年　７・26日米行政協定
　　射爆撃場存続決定
３１年　３　内浦小防音校舎完成
３４年　８・11沙入川沖米軍機墜落
３８年　３・８　誤射誤爆相次ぐ
　　町議会即時撤去決議
　　12・9区長会主催射爆場撤
　　去町民大会開催
４０年　１・31射爆撃場日米共同使
　　用となる
４２年　12・21　町議会自衛隊共同
　　使用承認
４５年　９・15米軍射爆場運用停止
　　撤収
４７年　３　射爆撃場日本へ返還
　　10・12　町長、射爆撃場自
　　衛隊使用同意書に調印
４８年　１・24町議会使用承認
　　５・15射爆撃場５年以内返
　　還陳議決定
　　８・６　自衛隊訓練再開
５３年　６・７　射爆撃場自衛隊より
（１９７８）　返還

（「岡垣町町史」より）

子どもたちによる海岸清掃



ふ化したアカウミガメの赤ちゃん

なぜ、地域住民が岡垣射爆撃場撤去闘争に立ち上がったのでしょうか

2 遠賀川と私たちの暮らし

-2 遠賀川と石炭

（1）「石炭」って何だろう？

石炭は、石油が普及するようになるまで、人々にとってとても重要な燃料として、あるいは、工業原料としてさまざまなところで利用されてきました。

そして、現在も発電所や製鉄所などいろんなところで利用されています。

その石炭は、どのようにしてできたのでしょうか？

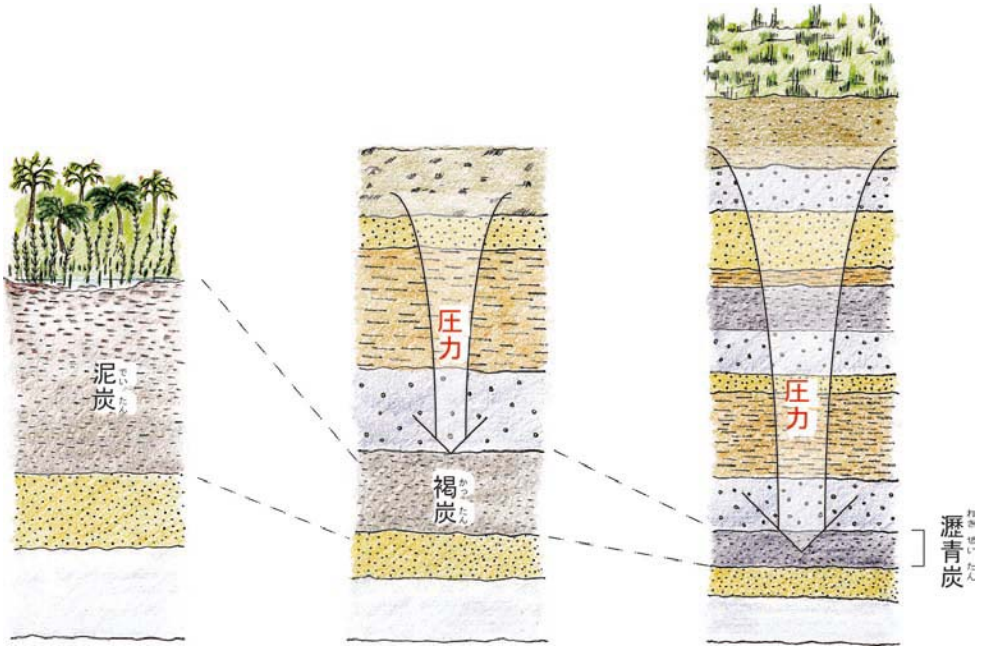
日本で採掘される石炭は、今から6000万年前に生育していたメタセコイアという木からできています。メタセコイアが枯れて、倒れ、淡水の湿地に埋もれ、堆積物の圧力でしだいに炭化が進んでいきます。

「泥炭」から「褐炭」そして、「瀝青炭」と炭化が進んで、数千万年後にようやく石炭になります。

温度や圧力が十分高い場合には、硫黄分の少ないとても良質の石炭になるといわれています。

石炭は化石燃料のうち、埋蔵量も多く、とても、身近な存在として、世界中で採掘され、多くの国で今も広く利用されています。

メタセコイアの森



石炭ができるまで（水巻町歴史資料館特設展パンフレット「水巻の炭鉱とその暮らし」より作成）

石炭がどんなことに使われているか調べてみよう

（2）「石炭」の発見

石炭は、1469年、福岡県の三池郡稲荷村で「燃える石」として、初めて発見されたと伝えられています。遠賀川流域の筑豊地方では、1478年に五郎太夫という人が、遠賀郡埴生村（現中間市垣生）で、「燃える石」を発見したのが始まりといわれています。

五郎太夫が、埴生村で、石炭を発見したころは、筑豊の各地で「燃える石」が発見されて、農民たちが薪がわりに使っていたと思われます。遠賀川下流の遠賀郡では「1478年、香月村の金剛山にて、黒石を掘り出し薪とす」という記録があります。1692年に長崎街道を旅したオランダ人の日記に、木屋瀬にて、村民が、石炭をたいていたことが記されています。1703年に書かれた『筑前続風土記』には、「焼石、遠賀、鞍手、嘉麻、穂波、宗像郡のところどころの山野に、これあれ、遠賀、鞍手、ことのほか多し、そのころ糟屋郡の山にても掘る」と記されています。

18世紀代には、大雨や旱魃の年が多く、飢饉が起こることもありました。

そのため、焚石（石炭）掘りにやとわれて働く農民たちがふえてきました。遠賀川上流の嘉穂郡稲築（現 嘉麻市稲築町）では、「1733年（享保18年）に焚石（石炭）を掘っている時、上の石が落ちてきて、男女6人が死んでかわいそうである」と書かれたれた石碑が見つかっています。

18世紀の中ごろには、焚石（石炭）が中国・四国地方の塩田や福岡方面にも、船で送られるようになりました。

19世紀頃には、条件のよいところはすでに掘りつくされて、無理な焚石（石炭）の採掘がおこなわれていたと思われます。遠賀川流域には石炭がたくさん眠っている筑豊炭田があり、福岡藩では江戸時代中ごろから石炭を各地で掘るようになっていたのです。

石炭の写真資料提供　岡垣町立吉木小学校

タヌキ掘りの図

地域の歴史資料館などに行って石炭はどのようにして発見されたのか調べてみよう

（3）近代発展を支えた石炭と遠賀川

福岡県の北部を流れる遠賀川の川筋一帯は「筑豊地方」と呼ばれています。その筑豊地方には、かつて「炭鉱」といって、地面の下から、石炭を掘り出す仕事がとても盛んでした。日本全国の石炭の産出量の半分くらいを筑豊地方の「炭鉱」が出炭したこともありました。

そこで、この筑豊地方の炭鉱地帯のことを「筑豊炭田」と呼んでいました。今も、筑豊炭田には、約15億トンの石炭が眠っているといわれています。

石炭産業は、19世紀から20世紀の日本の近代化が急速に進む中で、それを支えるエネルギー源として重要な役割を果たしてきました。

1901年、当時の福岡県八幡村(現北九州市八幡東区)につくられた官営の八幡製鉄所の燃料や原料に使われました。

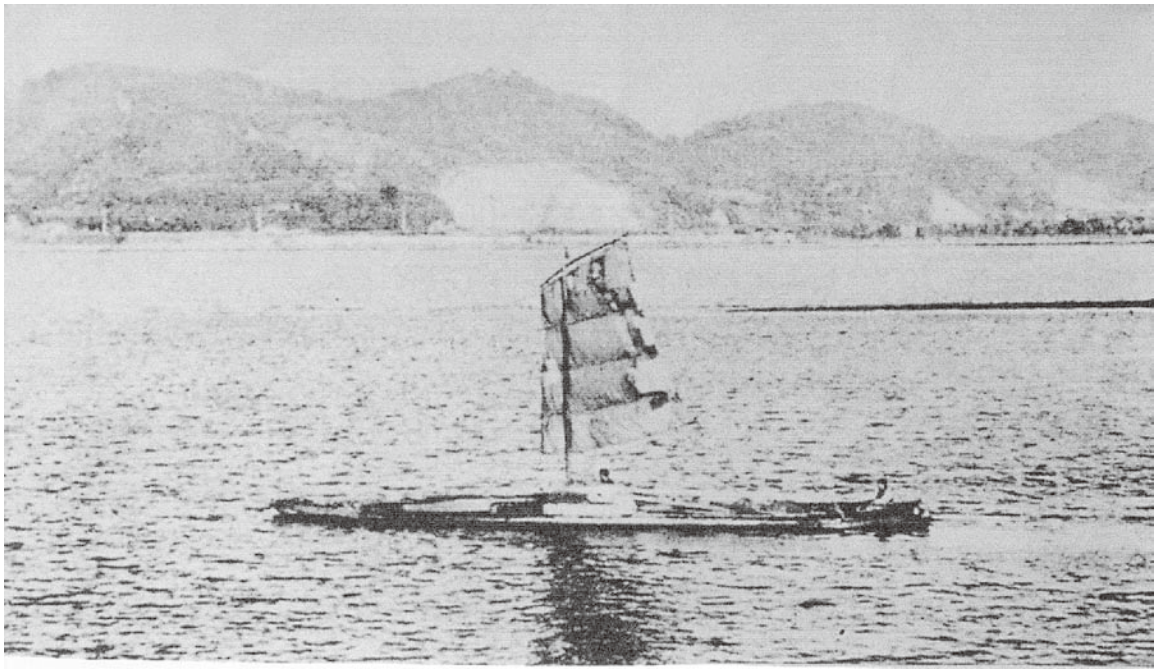
筑豊炭田で掘られた石炭は鉄道が開通するまでは、「川ひらた」と呼ばれる川舟に積まれて遠賀川を通って芦屋の港や若松の港まで運ばれていました。

遠賀川は鉄道が開通するまでの間、石炭の重要な輸送路だったのです。

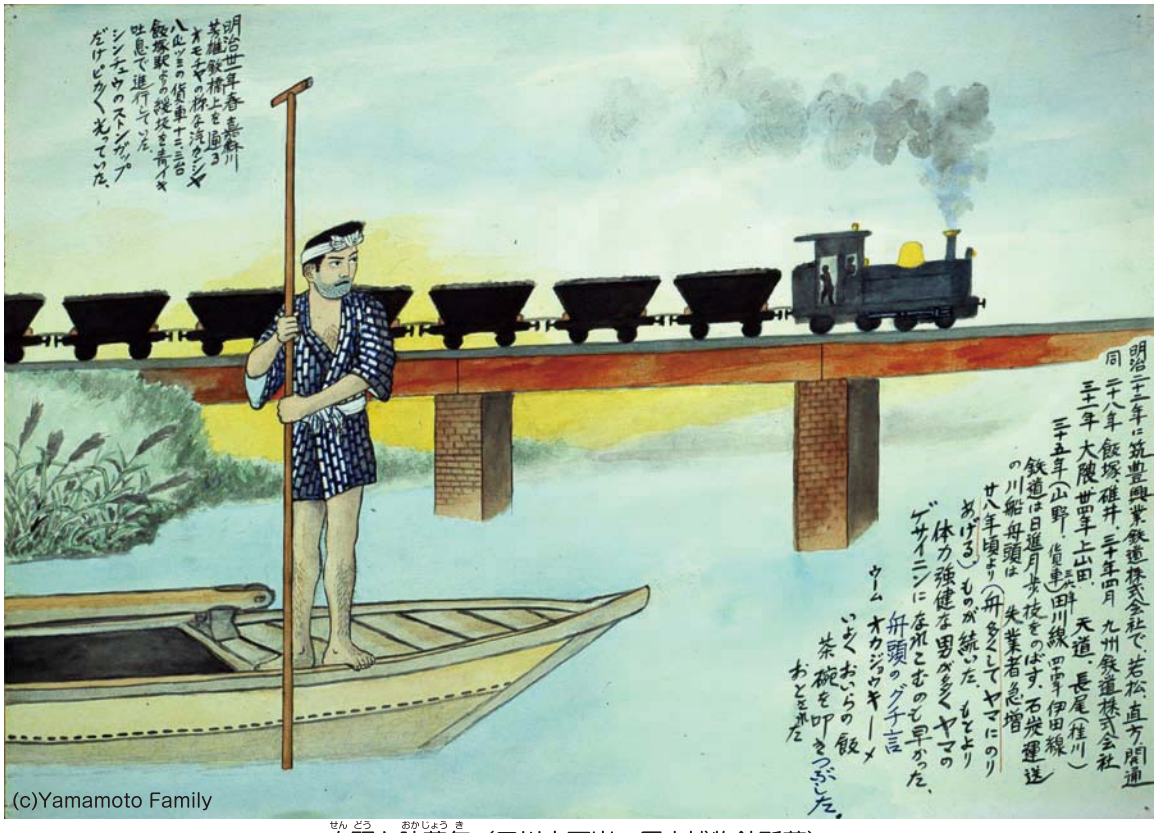
最盛時の
筑豊炭鉱分布図

日本の近代産業を支えてきた石炭産業の歴史や人々の暮らしを調べてみよう

2-2 遠賀川と石炭



遠賀川をゆく「川ひらた」　（国土交通省遠賀川河川事務所提供）



舟頭（せんどう）と陸蒸気（おかじょうき）（田川市石炭・歴史博物館所蔵）

石炭を運んだ「川ひらた」のことを調べてみよう